

東日本大震災から9年・・・町の復興状況を写真で紹介します

新地駅周辺では新地エネルギーセンター、複合商業施設、多目的運動場、ホテル・温浴施設、町交流センターが完成。沿岸部では防潮堤、漁業施設、海釣り公園、釣師防災緑地公園が完成し、釣師防災緑地公園は人気スポットで休日は来園者で賑わいます

町の施設全般について、新型コロナウイルス感染防止のため利用制限を行っております。



山頂で日の出を待つ登山者

町のシンボル、標高430mの鹿狼山は子どもからお年寄りまで手軽に登ることができる山として、年間を通して多くの登山者が訪れます。元旦は、日本一早い山開きと銘打って、今年は3千5百人が山頂で日の出を迎えました。

被災者の住まい再建は早くから進み、ほぼ終わりました。復旧工事は、道路・河川橋梁の一部を残すのみとなりました。

津波で大きな被害を受けた新地駅周辺地区、鉄道が内陸に移設され、数メートル盛土した新しい街には住宅建築が進み、町及び民間分譲地の売れ行きは好調。

駅東には、診療所、LNG活用の新地エネルギーセンター、フットサ場が整備され、駅西では、駐車場、複合商業施設、ホテル・温浴施設が営業を開始。また、温泉スタンドも整備中です。

駅前の町文化交流センター（観海ホール）も開館待ちです。



整備が進んだ駅周辺、その西側には住宅が建ち並ぶ

津波被災地の多くの防災緑地は、津波からの減災機能を重点に整備されていますが、釣師防災緑地は漁港や海水浴場に近く、多くの人が集うことから、減災、慰霊・追悼の場に賑わい機能も持つ施設に整備しました。遊具、バーベキュー広場、オートキャンプ場、そして世界でも屈指のパントラックコースも整備され、交流人口の拡大が期待されます。



速くには蔵王連峰が望めます

冬でも休日は賑わいます

しんちまち

新地町の名産・名所



	H26/4/1	R2/2/1
人口	7,936人	8,152人
世帯数	2,609世帯	2,878世帯
面積	46.69km ²	

H26/04は震災後最も少ない時の住基人口。直近は、毎月1日福島県調査の現住推計人口。震災後の転入者には、住民未登録者が多く住民基本台帳人口とは合わない。



**福島県浜通り地方
最北端のコンパクトな町**



【カレイ】



【コウナゴ】



【ニラ】



【いちじく愛す】



【スイートマシェリ】



【鹿狼山
年間来訪者4万人】



【清酒 鹿狼山】

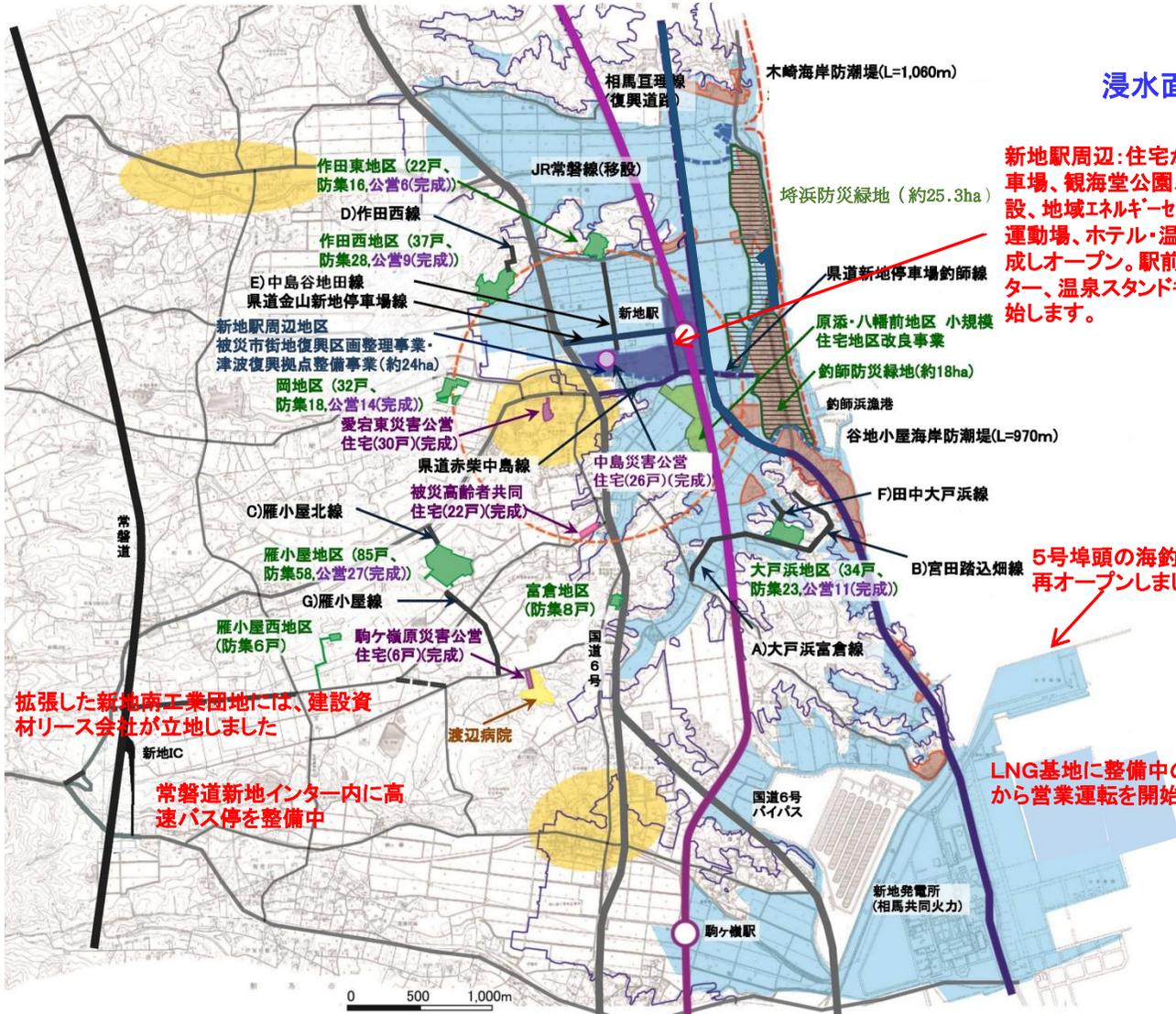


【花木山ガーデン】
標高140m
からの絶景

新地町 主な復興事業箇所図

浜通りの最北端の町

浸水面積は水色部 9.27km²



新地駅周辺:住宅が建ち並び駐車場、観海堂公園、複合商業施設、地域エネルギーセンター、多目的運動場、ホテル・温浴施設が完成しオープン。駅前の交流センター、温泉スタンドも近く供用開始します。

5号埠頭(海釣り公園)は、昨年4月に再オープンしました

LNG基地に整備中のガス発電所は、4月から営業運転を開始します



- ① 防災集団移転促進事業 移転団地
- ② 区画整理・津波復興拠点整備事業
- ③ 公営住宅
- ④ 被災高齢者共同住宅
- ⑤ 小規模住宅地区改良事業
- ⑥ 県道整備
- ⑦ 町道整備
- ⑧ JR常磐線移設
- ⑨ 河川
- ⑩ 防災緑地
- ⑪ 海岸防潮堤

- 浸水区域
- 標高10m
- 既存の国県町道
- 既存の中心的集落



- 新地町の復旧・復興状況 -

安心・安全なまちづくり（町復興計画の5つの基本方針）

1. 沿岸北部復興イメージ

(沿岸部の断面図)

A-A'断面

⑤「10m以上」の高台に住宅を再建

②災害危険区域指定+被災地
買取り+防災緑地整備

①防潮堤は以前より1m高く

安全な場所で
JR常磐線再建
10m以上の区域で
住宅再建

二線堤の整備

丘陵状堤防、公園、
防潮林等

防潮堤

▼TP7.2m

▼T.P.:0.00m

作田西団地

作田東団地

2. 沿岸中部復興イメージ

⑤「10m以上」の高台に住宅を再建

③常磐線跡地を盛土した県道バイパスは「二線堤」の役目も

漁業、観光、レクリエーション
関連施設等用地

安全な場所で
JR常磐線再建

二線堤の整備

防潮堤

▼TP7.2m

▼T.P.:0.00m

国道6号

住宅地

農地

新地駅周辺:土地区画整理事業による新しい街

雁小屋、岡団地ほか2団地

④常磐線は、まちづくりと一体で内陸
に移設

漁港背後の高台:漁師
が多い大戸浜団地

- ①防潮堤は、以前のTP6.2mから7.2mに。
- ②被災した土地を買い取り、代金を住まい再建に活用し土地は防災緑地等に。
- ③常磐線跡地を盛り土して第二の堤防(二線堤)に。
- ④鉄道は安全な内陸に移設し、かつ鉄道をまちづくりに生かす。
- ⑤住まい再建は、今回の津波到達高以上の高台と、新地駅周辺を安全な高さに盛り土した新市街地に整備。

－ 新地町の復旧・復興状況 －

東日本大震災から9年経過・「2020年3月」の復旧・復興事業進捗状況

1. 防災集団移転	防集団地整備は早くから進み、高台等7箇所に整備した団地(全157区画)は、残り区画が「2区画」のみで、入居率は「98.7%」。これまでの入居率推移は、2014年6月「7%」、2014年12月「64%」、2015年6月「88%」、2016年6月「95%」と、震災から4年3ヶ月で約9割が入居しました。
2. 災害公営住宅	被災者の住居確保のため災害公営住宅8団地129戸を整備し、入居率は現在95%となっており、多くの方々が生活しております。また、今年度から希望する方に災害公営住宅の払い下げを始めました。仮設住宅は昨年5月末で全ての入居者が退去し、最初の団地の入居から7年1ヶ月で全て廃止されました。
3. 被災高齢者共同住宅	親日国の台湾からは被災地に多くの支援をいただいています。新地町にも台湾赤十字社から3億円の支援をいただき、老夫婦のみや一人暮らしの高齢者世帯のため、小川の地場産市場「あぐりや」向かいに「22世帯」の長屋タイプの共同住宅を整備しました。
4. 被災市街地復興土地区画整理	新地駅から役場裏周辺「23.7ha」を盛土した新しい街には、地元住民の再建住宅の他に、町内外の移転者の住宅建築が進み町分譲地は完売。また、駅西エリアには防災センター(兼)消防新地分署、文化交流センター、石油資源開発社員寮・食堂、貸店舗棟、ホテル・温浴施設、駐車場、公園が整備され、駅東エリアにはクリニック、LNGを活用したエネルギーセンター、フットサル場が整備されました。消防分署北側には商業系施設誘致に向け宅地造成中です。
5. 防災緑地	釣師防災緑地(約18ha):管理棟、駐車場、遊具、オートキャンプ場等が完成し昨年12月に開園し、パンptrラックも近く完成します。(町事業) 埴浜防災緑地(約25.3ha):植栽、園路、四阿、駐車場など整備が終わり開園しています。(県事業)
6. 道路	(復興道路) 町道:避難道路は完了路線から供用中で、小沢北線を整備中。新団地と拠点施設を結ぶ新たな連絡路「雁小屋線」、「中島作田線」が整備されました。 県道:金山新地停車場線、常磐線跡地の相馬互理線バイパス、新地停車場釣師線、赤柴中島線は、整備完了区間から順次供用されています。赤柴中島線は、新地市街地を迂回し、新地インター方面に抜けるバイパス化に向けた工事が始まりました。 (災害復旧) 町道:44路線全ての復旧が完了しました。 県道:全路線が復旧し、以前の浜街道の県道は町道になりました。釣師防災緑地内には県内初の信号のない環状交差点が誕生しました。
7. 河川	(改修事業) 砂子田川:新地駅周辺区画整理事業や防災緑地と一体で進められ、河川拡幅・橋梁掛け替えが進み、下流の一部残区間を工事中です。(県事業) 地蔵川:防潮堤が1m高くなった関連で、河口付近の堤防嵩上げとルート変更、新橋梁の架け替え工事が終盤を迎えています。(県事業) (災害復旧) 三滝川、埴川、濁川:復旧工事が完了しました。(県事業)
8. 海岸	防潮堤:以前より1m高い「TP7.2m」へ嵩上げする工事が全区間終わりました。(県事業)
9. 農業	農地復旧:農地のガレキ撤去は大型機械によるフルイ分けと、人力でガレキを拾う作業を併用し完了しました。 排水機場・水路:被災した6箇所の排水機場、各所の用排水路もすべて復旧しました。
10. 漁業	釣師浜漁港は、岸壁嵩上げ工事、漁具倉庫再建、荷さばき所も完成し4月からせりが可能となります。地元で水揚げされた魚を加工する民間加工施設も出来ました。原発事故から9年が経過する現在、出荷制限魚種は2月25日で全て無くなりましたが、原発事故による風評被害は強く残っています。
11. JR常磐線	2016年12月、「浜吉田～相馬間」が5年9ヶ月ぶりに再開通し、残る双葉郡内未開通区間も3月14日に全て開通します。

新地町の復旧・復興状況

住まいの再建(1) 防災集団移転促進事業(7団地)、小規模住宅地区改良事業(小川原添地区)が早々と完了



作田東団地(防集16区画,町営住宅6戸)



作田西団地(防集28区画,町営住宅9戸)



岡団地(防集18区画,町営住宅14戸)



雁小屋団地(防集58区画,町営住宅27戸)



大戸浜団地(防集23区画,町営住宅11戸)



富倉団地 (防集8区画)



雁小屋西団地(防集6区画)



小規模住宅地区改良事業(小川原添地区)

小川原添地区は災害危険区域に指定せず、全壊住宅を撤去し堤防的な緑地を整備した

防災集団移転団地は、町の中心から概ね「1.5km」の範囲に、7団地157区画を整備し、早い時期から再建が進み、空き区画は2区画となりました。被災者の元宅地は広い方が多く、新たな団地整備では、それらの要望に添い国と協議を行い、ワークショップを重ね団地プランを修正し、完成した団地は満足度の高いものとなりました。

新地町の復旧・復興状況

住まいの再建(2) 災害公営住宅(8団地-129戸)、被災高齢者共同住宅(台湾からの支援で22世帯整備)



鉄筋コンクリート造、UR都市再生機構に整備を委託

愛宕東住宅(30戸)



各戸の間取りが異なります

作田東住宅(6戸)



各戸の間取りが異なります

作田西住宅(9戸)



雁小屋住宅(27戸)



渡辺病院前

最初に完成し4戸が払い下げ済み

駒ヶ嶺原住宅(6戸)



岡住宅(14戸)



各戸の間取りが異なります

大戸浜住宅(11戸)



各戸の間取りが異なります

中島住宅(26戸)

地場産市場「あぐりや」向いの被災高齢者共同住宅は、台湾赤十字の支援で整備



災害町営住宅は、防集団地5地区他3地区に129戸整備され、払い下げが始まりました。また、被災した高齢者のため、台湾赤十字社の支援により22世帯分の共同住宅を小川地区に整備しました。

新地町の復旧・復興状況

JR常磐線復旧、新地駅周辺土地区画整理事業、防潮堤整備事業



JR常磐線は2016年12月に再開通



新地駅前の文化交流センター、愛称は「観海ホール」



東京大学と連携した研究・交流施設が駅前に



利用制限中です

駅東のフットサル場は「スマイルドーム」



東側を通る天然ガスパイプからガスを引き込み発電

駅東の「新地エネルギーセンター」

新地駅周辺の住宅地では、町内被災者の住宅再建がほとんど終わり、転入者等の住宅建築も盛んです。駅前駐車場、複合商業施設、ホテル・温浴施設がオープンしました。町の文化交流センターも近く開館します。駅東エリアでは、天然ガスを電気・熱・Co2に変え、駅周辺施設で活用する「新地エネルギーセンター」、フットサル等の多目的運動場が完成し、子供から大人まで大勢の人が利用しています。



埴浜地内：防潮堤と緑地北端部



防潮堤：漁港南ドック端部

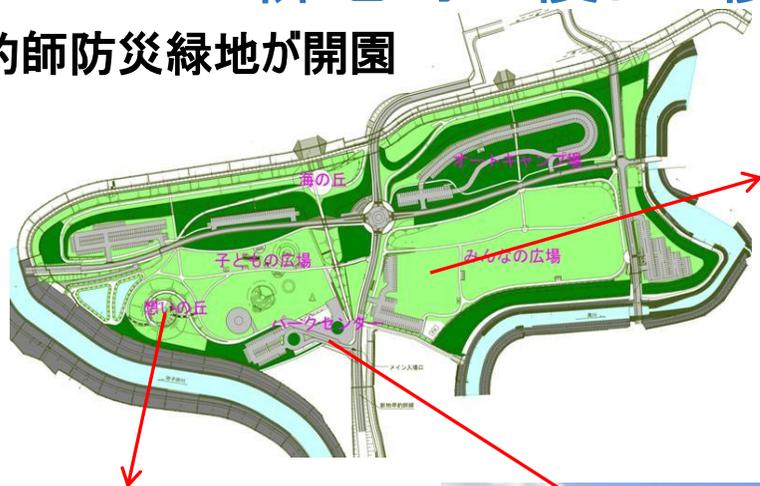


海水浴場と防災緑地をつなぐ幅広階段

防潮堤の復旧と新設は、宮城県境近くから釣師浜漁港南端まで、以前より「1m」高いTP7.2mの高さで整備されました。釣師浜海水浴場と背後の防災緑地公園をつなぐ「幅広階段」も整備しました。

新地町の復旧・復興状況 防災緑地、道路整備事業

釣師防災緑地が開園



パンプトラックコースの舗装部が完成。世界でも屈指のコースです

沿岸部集落跡の釣師・埴浜地区には津波の力を減衰させ漂流物を捕捉する防災緑地を整備し、全国からの協力で「どんぐり、黒松」等を植えて育てています。

道路は震災の教訓から、新設する避難道路は「踏み切り」をなくしました。県道も復旧と改良が進み順次開通しています。また、大きな防集団地ができて交通量増加に対応する、新しい道路も複数路線整備されました。

震災直後、沿岸部の大戸浜地区は周囲の浸水で孤立し、ただ一本の高台の細い砂利道を通り、命からがら避難した道は「命の道」と呼ばれ、交差可能な複数の待避所が整備されました。

新型コロナウイルス感染防止対策のため遊具の利用を禁止しています



想いの丘、左から慰霊碑、モニュメント、震災記録碑



管理棟(パークセンター)

新型コロナウイルス感染防止策のため、トイレ以外の利用を制限中



パークセンター内のサロン。普段はくつろぎの空間でイベントにも活用(現在、利用制限中)



町道: 大戸浜富倉線は踏切を無くしました



県境の磯山付近

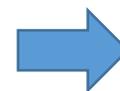
県道: 元の常磐線はバイパスになりました



町道雁小屋線: 団地から総合公園方面へ



大戸浜「いのちの道」



当日、津波で周囲が浸水し、この高台の砂利道だけが通れた



待避所を10箇所つくり交差が楽に

新地町の復旧・復興状況

河川・農地・農業用排水路の復旧、漁業・林業の再生



区画整理事業隣接区間は緑道も整備

河川：役場裏東方の砂子田川



河川：濁川下流釣師橋より



右上、「ふるい掛けされたガレキ」も片付き
復旧した埴浜の農地

農地のガレキ撤去も完了（埴浜付近）



農地復旧は終わり作付け



排水路が復旧した駒ヶ嶺駅東「江堀川」



白魚漁で賑わう釣師浜漁港（2018年2月）



大戸浜に出来た民間の水産加工施設



林業：ふくしま森林再生事業
森林の放射線量低減と里山の再生を図ります

河川は拡幅・護岸・橋梁工事がほぼ終了。農地復旧は大量のガレキ撤去を機械と人力で実施し完了。

漁業は釣師浜漁港の岸壁嵩上げ・漁具倉庫再建が早々と進み試験操業を実施中で、荷さばき所も完成。漁港周辺には地元産魚を加工する民間の施設、新地町相馬市にまたがる沿岸部には、新地発電所の温排水を利用した水産資源研究所が完成しました。漁業の課題は原発事故による風評被害と、近年の海水温等海の環境変化による不漁続きがあります。

林業は森林の放射線量低減と山の再生を図る、福島県独自の事業で間伐等を実施中です。

新地町の復旧・復興状況

大規模プロジェクト(町の人口増)、定住促進、町外からの移転再建者、仮設住宅の廃止



相馬港新地エリアで整備中のLNG基地



商業用地は盛土がほぼ終わる(消防署北エリア)



福田地区に整備した若者向け定住促進住宅。
他に新地駅前にも整備しました。

福田定住促進住宅 --- 12戸



地区世帯が大きく増加した岡地区、他の増加地区も移転者の再建ピークが終わる

町外からの移住者が多い「岡地区」



震災後町内に建築されたアパートは40棟以上200世帯を超え、開発関連事業社員が町外から入居し、少子化の中でも現住人口が増えた時期がありました

震災後、多くの町外被災者が新地町に住宅を再建し、その数は190世帯を超えています。新地の岡地区、駒ヶ嶺の原地区は特に移転者の多い地区です。また、新地駅周辺土地区画整理事業でも、町や民間分譲地を購入した町外者が住宅を建築し、人口増につながっています。一方、町中心部から遠い福田地区は人口が増えにくく、人口増施策として若者定住促進住宅を12戸整備し、今後は宅地を造成して分譲します。定住促進住宅は、新地駅前地区にも8戸整備し、両地区とも入居要件を緩和しました。



町最初の仮設住宅が建った陸上競技場

仮設住宅撤去後は元の陸上競技場に復旧



多くの町外者が入居していた「がんごや仮設」

役目を終えて廃止撤去されました

仮設住宅は当初、町民の被災者向けに計画されましたが、原発事故による町外被災者からの入居希望が多くあり、追加で「がんごや仮設住宅126戸」を建設し、計「573戸」を整備。町民の住宅再建が順調に進み、順次廃止・解体され、最後まで残った「がんごや仮設住宅」も、2018年5月末で廃止されました。そして、仮設住宅に入居した縁で多くの方が町内に住まいを再建しました。



新地駅周辺において「地域エネルギーセンター事業」と「エネルギーマネジメント事業」を構築

■地域エネルギーセンター事業

- 相馬LNG基地からの天然ガスを活用し、ガスコージェネレーションシステムから新地駅周辺施設(ホテル温浴施設、交流センター等)へ熱と電気とCO2を供給
- 天然ガス専用導管・減圧装置を含むバルブステーションの構築、熱導管・電力自営線・CO2供給管の構築

■エネルギーマネジメント事業

- 公共施設等に災害時にも活用できる太陽光発電設備と蓄電池などを導入、駅周辺にソーラー街路灯を整備
- エネルギーマネジメントシステムを構築、地域内のエネルギー需給バランスの最適化

設備導入計画

対象施設	設備	設備容量等
地域エネルギーセンター	コージェネレーション	175kW
	太陽光発電	50kW
	蓄電池	50kWh
交流センター インキュベーション スクエア	太陽光発電	30kW
	BEMS	2基
スポーツ施設	太陽光発電	5kW
戸建住宅	HEMS	125基
	太陽光発電	20kW
防災センター	蓄電池	15kWh
	BEMS	1基
周辺地域	ソーラー街路灯(蓄電池)	6基

電気+熱+CO2



熱電供給エリア

- 地域エネルギーセンターからの熱電供給範囲(鉄道施設除く)

コージェネレーションとは：ガス等を駆動源にした発電機により電力を生み出すとともに、同時に発生する排熱を活用するシステム・設備の総称です

凡例
 天然ガス専用導管
 熱導管(冷熱)
 熱導管(温熱)
 自営線
 CO2供給管
 ※供給管のルートはイメージです。

天然ガスパイプライン

心の復興・「復興フラッグ」 自衛隊が沿岸部に立てた初代旗を形を変えて受け継ぐ

デザインが変わった「四代目」フラッグは、役場駐車場に仮掲揚されていましたが、開園した釣師防災緑地公園内の環状交差点脇「復興フラッグ広場」に移されました



← 自衛隊が立てたと言われている初代日の丸
2011年4月7日・大戸浜地内

3. 11 あの時を振り返って



震源、電車乗客の避難、10mを超える大津波

2枚の写真(津波襲来と電車乗客避難)は、沿岸部現場から戻る途中の建設会社社員が撮影したものです。撮影の時間差は「5分」、電車に乗り合わせていた二人の若い警察官の誘導は、今も語り継がれています。

下水処理場の屋根は約15mの高さ。町では正確な津波高の記録はないものの、確実に「10mを越えていた」と思われます。



役場に避難する電車の乗客、写真からは急ぐ様子うかがえず、大津波は誰も予想できなかったのではと・



ここが常磐線、約200m左側に駅があり電車が緊急停車していました

役場庁舎裏の津波襲来直後。役場敷地は20センチ以上浸水し、ガードレール奥の砂子田川は、新地駅や中島集落から流されて来た車で埋まりました



自衛隊先発隊19名が翌早朝に到着、その後次々と遠方から大部隊が到着(写真は3/15日)

車庫棟は自衛隊炊事班が炊き出しに使用

山には雪が残る寒い日々が続く



平成13年建築の庁舎は、地震で内装にヒビが入る程度と被害はほとんどなく、停電とトイレ以外は以前と同じ環境で、震災の初期対応が迅速に出来ました。自衛隊・警察も、寒い中のテント泊ではなく、総合体育館で寝泊まりし、老人憩いの家の浴場も使用出来たなど、堅牢な公共施設が災害時に役立つことを証明しました。

庁舎4階展望ロビーから中島集落・新地駅方面

2011/03/16撮影

新地駅で折れ曲がった電車



この車両は現在、白河市のJR東日本研修センターに展示されています



沿岸部4地区の被災状況



死者 119人(関連死含む) 津波による全壊「467」世帯



←
埴浜地区

全壊:61世帯



←
釣師地区

全壊:159世帯



←
大戸浜地区

全壊:101世帯



←
今泉地区

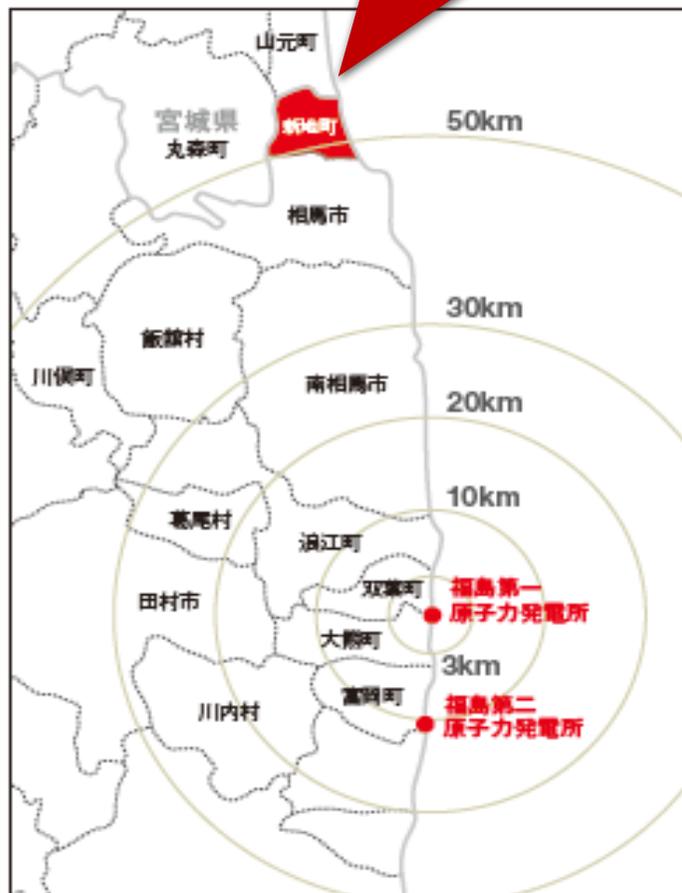
全壊:17世帯

福島第一原発事故と新地町

2019年12月14日の空間線量

0.01~0.09 μ Sv/h

(町測定 of 最低値と最高値：低くなってきたため
 半期ごとに測定)



- 3/12 1号機 爆発
- 3/14 3号機 爆発
- 3/15 2,4号機 爆発



屋内待機や捜索中止の指示。停電のため正確な情報が入らず、どうしたらいいか分からない状況に、町民の不安は高まり、遠方まで避難した町民もいました。



▲第一原発 津波襲来

爆発事故当時、6号国道より東側の役場庁舎は停電エリアでテレビが映らず、電話やメールも繋がりにくく、情報は捜索を中断し屋内退避した自衛隊・警察から断片的に入るのみで、職員の多くは重大事故の詳細を知り得ませんでした。

2020年1月22日の空間線量(県測定)

鹿狼山登山口 (原発から51km)	新地町役場 (原発から52km)
0.06 μ Sv/h	0.06 μ Sv/h

▼3号機爆発後



仮設住宅の建設から廃止。 写真は、2011/04/25入居開始の総合公園グランド仮設

- ・仮設に適した公共用地の他、町民からの土地協力により津波被災地で最も早い入居が実現
- ・町内8箇所に「573戸」建設し、最後の入居者が2018年5月末に退去し全団地廃止
- ・町外被災者も多く受け入れ、その一部や友達が町内で住宅再建し現住人口増につながる



震災直後と現在



2011年3月16日と同位置の復旧後



沿岸部集落から流された住宅や車両等ガレキで砂子田川や水田が埋めつくされた役場東方



2019年2月8日

復旧中の県道は一部が供用を開始し、砂子田川は改修され大きく拡幅されました



小川の「入り江」地形の端部は、ガレキが大量に集まりその中で自衛隊の搜索活動が行われていました



2017年9月

元の水田に復旧されました



役場4階展望テラスから釣師方面を望む。集落が消滅し5日たっても水が引かずに残っていました



2019年7月5日

鉄道は内陸に移設し、元鉄道敷は県道バイパスに。駅前にはホテル他大規模建築物が多数出来ました



ここを開けると「かまど」になる

かまど

薪があれば煮炊き出来ます

企業誘致、観光など賑わい創出



新地インターに隣接する高速バスストップは、待合所建築も終わる



釣師浜海水浴場は、今年9年ぶりに再開しました



被災した相馬港5号埠頭の海釣り公園は、昨年4月に再オープンし連日大物が...



味菜ひろば「よりみち」

町には果樹も含め数軒の地場産の店があり人気スポットです。中でも先駆けの「あぐりや」は、3年前の来客数が延べ11万人を超え、安く新鮮な野菜をはじめ、菊など新地の花も人気の一因で、町外からも多くの方が買い物に訪れます。また、6号国道沿いの「味菜ひろば・よりみち」は、ここだけ限定の「ニラかりんとう」、「味菜たれ」、「特製ギョーザ」が人気です。近隣市町にライバル店が複数出来ましたが、特色を生かして頑張っています。



地場産市場「あぐりや」は20年越え

今後の残事業

- ・県道相馬亘理線の大戸浜南部工区
- ・河川改修(地蔵川、砂子田川、濁川田中橋架け替え)
- ・被災者支援事業(町独自60万円補助、再建住宅の利子補助、引越代金補助ほか)



鹿狼山マルシェ。毎月下旬鹿狼山登山口で開催し地場産品を販売。

今後の残事業

- ・県道相馬亘理線の大戸浜南部工区
- ・河川改修(地蔵川、砂子田川、濁川田中橋架け替え)
- ・被災者支援事業(町独自60万円補助、再建住宅の利子補助、引越代金補助ほか)

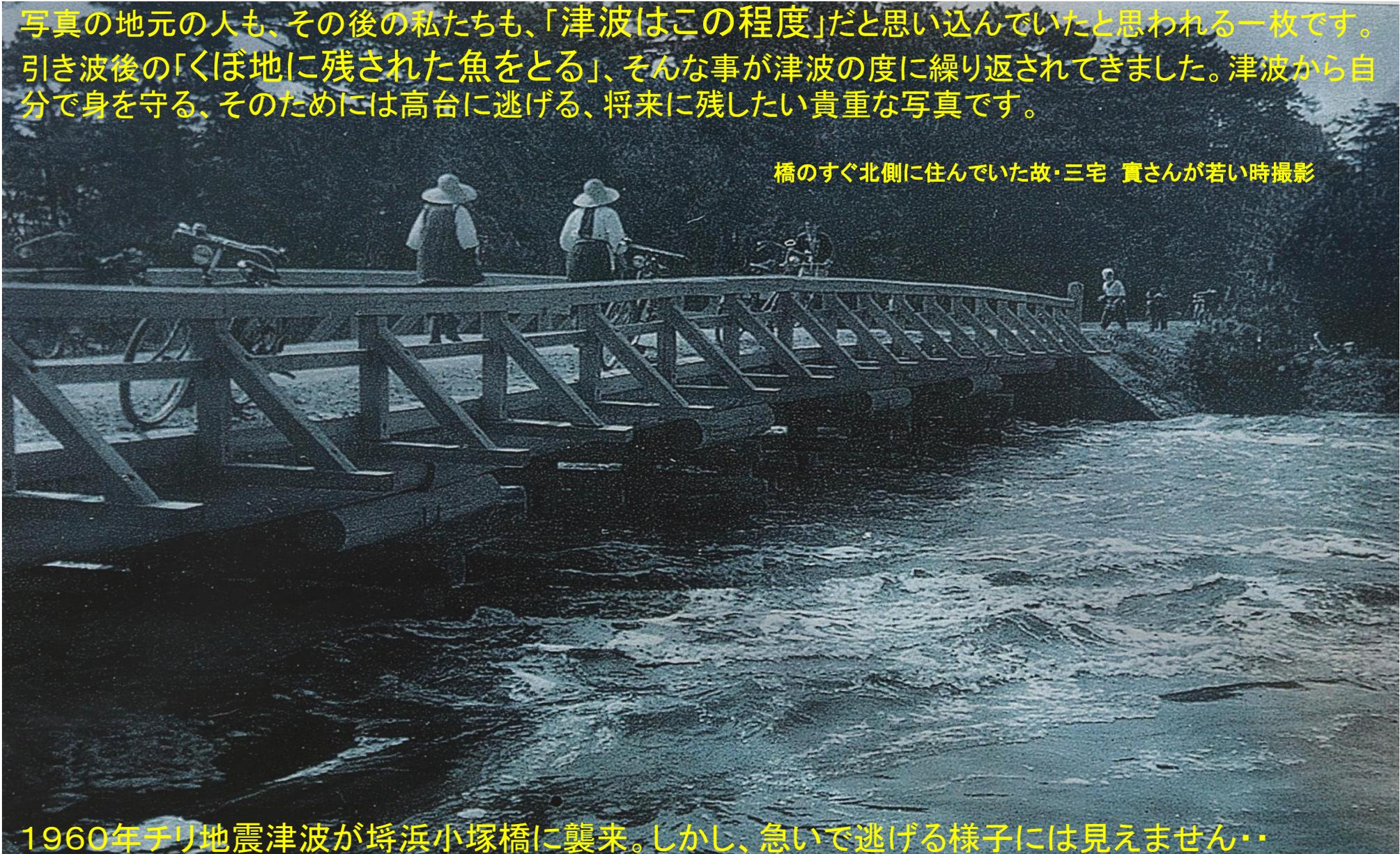
震災を教訓に、後世に伝えたい一枚の写真

(1)津波を甘く見ないで

写真の地元の人も、その後の私たちも、「津波はこの程度」だと思い込んでいたと思われる一枚です。引き波後の「くぼ地に残された魚をとる」、そんな事が津波の度に繰り返されてきました。津波から自分で身を守る、そのためには高台に逃げる、将来に残したい貴重な写真です。

橋のすぐ北側に住んでいた故・三宅 實さんが若い時撮影

1960年チリ地震津波が埴浜小塚橋に襲来。しかし、急いで逃げる様子には見えません・・・



(2)犠牲者が出た踏切遮断機、その教訓を生かした避難路づくり



震災後、幹線避難道路は「踏切」のない立体交差に → 大戸浜富倉線「大富希望の橋」

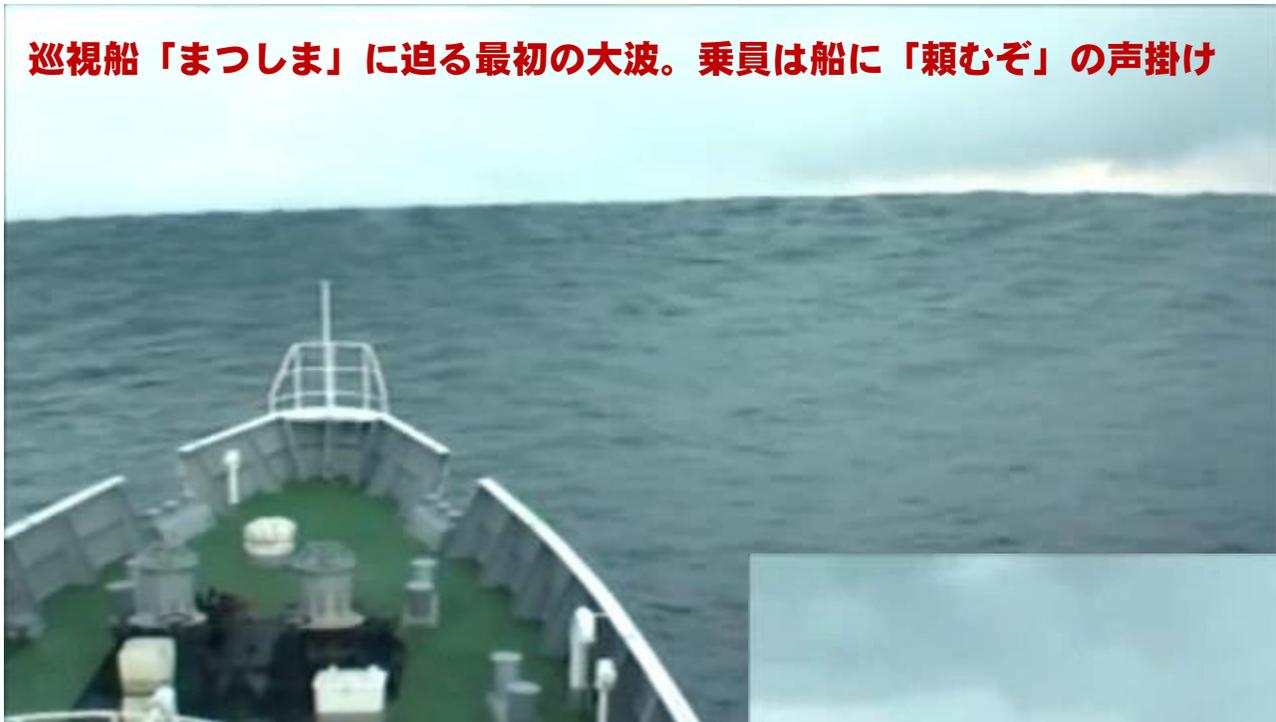


(3)命をかけた漁船の「沖出し」

写真は相馬港から沖に出る巡視船「まつしま」

巡視船「まつしま」に迫る最初の大波。乗員は船に「頼むぞ」の声掛け

画像は「海上保安庁」より



巡視船「まつしま」は、当日たまたま相馬港で訓練中でした。船を守るため漁船同様沖に出ました。まつしまは680トン、その後、老朽化により引退しました。

大波を越える瞬間・・・

新地の漁師も、大切な船を守るため沖出ししました。沖出しに向かった36隻のうち、エンジントラブルの1隻が波にのまれ一人が犠牲になり、もう1隻は波にのまれて沈没し、漁師は海に投げ出されましたが、運良く仲間の船に助けられました。他にも、修理中で自力航行出来ない船一隻も、船を守るため仲間の船に曳かれて沖出ししました。波がおさまった翌日、34隻の船が釣師浜漁港に戻りました。漁船は巡視船と違い小型のため、大波越えはとっさの判断で、斜めに波に向かい乗り越えたそうです。



おわり